

近代におけるサンスクリット文法書の出版

——シユテンツラー・ピツシエル・荻原雲来——

西村 実 則

『実習梵語学』

サンスクリット文献を読む上で、文法書の存在は必須である。明治四十一年（二九〇八）、わが国で初めてサンスクリットの文法書、『梵語入門』を出版した荻原雲来はこの年、四十歳。宗教大で教鞭を執り、芝中学校の校長を兼ねていた。この書は序文にあるように、ドイツのフリードリッヒ・シユテンツラー（一八〇八—一八八七）の著した文法書、*Elementarbuch der Sanskritsprache* をそのまま翻訳したものである。荻原は序文でさらに次のようにいつてゐる。

梵語の本邦に伝はること久し矣、されど僅に仏教家特に真言宗一部学者の伝ふる所にして其学習の材料も亦甚はだ不完全なりき。浄厳・慈雲の如き篤学宏才ありしと雖も奈何せん当時原本は僅に五六種に止まり、加之完全なる文法書なく字書なく到底其堂奥に上るを得ざりき。

奈良、京都の寺には古来、梵語で書かれた貝葉、紙本の断片がいくらか存在し、真言宗の学者に珍重されてきた。

江戸時代になると、湯島靈雲寺の浄嚴（二六三九—一七〇二）、慈雲尊者飲光（一七一八—一八〇四）がそうした断片類を整理蒐集したことがある。また荻原以前には南条文雄、高楠順次郎などがヨーロッパに留学し、サンスクリット、パリ語、チベット語を習得し、原典にもとづく仏典の研究が開始され始めた。しかしながらサンスクリットの文法書、辞典類が依然として編纂される機会はなかったのである。

是に反して近來は文運の勃興に連れ言語学の進歩に伴ない梵語は単に印度古本の用語たるのみに非ずして希臘羅甸乃至英仏独露なぞの言語の本幹なること発見せられ印度欧州語として欧米には盛に研究せられ、現今にては梵語の本源なる印度より却て欧米に於て完全なる梵語の文法書字典の製作を見る。本文の出版批評的著作実に牛に汗するも及ばざるの盛況を呈す。

荻原雲來の時代、欧米ではサンスクリットが東洋の全く異質な言語でなく、ギリシャ語、ラテン語、ドイツ語などと共通の源泉から発生したものであり、言語学の一分野つまりインド・ヨーロッパ語族として体系づけられ、加えてサンスクリットの文法書や辞典まで出版されている。サンスクリット語文献も旧に倍する勢いで施訓出版の様相を呈していた。

これ啻に言語学として梵語研究の必要あるのみならず、印度の宗教思想は最も豊富に変化、最も多く宗教を語るものは必ず第一に指を印度に屈す。又哲学に於ても文学に於ても興味津々汲んで尽きざるものあり。斯かる文学芸術を研究するため延たは東洋古代百般の学芸を研究解釈するに須要なるものあるがゆえなり。

言語学の一分野としてのサンスクリット研究ばかりでなく、宗教研究の上で何よりインドは重要である。インドの哲学、文学、芸術などの研究は東洋全体の学芸に資するところ大である。

我邦は夙に東洋文華の粹を蒐め今や西洋の文明を加味しつつあり此間に処する吾人学徒たるもの我文華の淵源を研究せず、東亜同胞の制度文物を知らず、而して独り泰西学者の研鑽に委して顧みず、豈に夫れ可ならんや。すでにわが国には東洋諸国の文化の粹ばかりでなく、西洋文化も導入されつつある。こうした時代に東洋の同胞であるインドの文化研究を欧州の学者だけに一任したままよいのであろうか。

仏教を学ぶもの漢訳書にのみ依頼すべきの時に非ず、尚又南方仏教を知らんとする人の為には幸にパーリ三蔵出版の將に完結せんとする此の時に際し梵語を学習するは最も緊要なりとす。パーリ語は梵語より転ぜり故に梵語を学ばばパーリ語は勞せずして読み得に至る。仏教家たるもの奮起一番原本研究に心なきか。

仏典研究はもはや漢訳だけで済まされる時代ではない。南方仏教を知ろうとする人もパーリ語の経律論の出版が完結に近づきつつあるいま、パーリ語はサンスクリットの俗語形ゆえ、サンスクリットを学習すれば双方ともに容易に読めるであろう。だからサンスクリットの学習は「緊要」という。

今般の『梵語入門』はシュテンツラーが一八六八年に出版し、それを一八九二年にリヒャルト・ピツシエル(一八九四—一九〇八)が改訂した第六版を翻訳し、若干の入れ替えと例文を補充したものであるという。

荻原は『梵語入門』を出版した七年後、改訂を加えた新装版『実習梵語学』を出版した。新装版の序文によると、当初の出版から七年の間に河口慧海(一八六六—一九四五)がチベット、ネパールから梵語写本類を四百部持参するという壮挙があつた。そのためわが国に存在するサンスクリット写本の量はいまや欧米にあるものを凌駕するほどになつたという。

世の印度研究を以て天職とする者、仏教鑽仰を以て本務とする人は、既に是の如き嘉肴珍の前に羅列せるあり、奚ぞ其の一端をも賞味せざらんや。

インド仏教の研究者、それに仏教者であろうとそうした写本類の一端でも「賞味」したらいかかという。

シュテンツラー

シュテンツラーの文法書は現在でもドイツでインド学を学ぶ者の教科書として採用され、吹田隆道氏の報告によれば、一九八〇年時点で第一七版を重ねているという。

著者シュテンツラーはドイツのインド学草創期の一人であり、一八〇七年、ヴォルガストに生まれた。一八二六年、神学、アラビア学、ペルシヤ学を学ぶためにグライスヴォルトに行く。その後、ベルリン大学のサンスクリット学者フランツ・ポップ（二七九一—一八六七）に出会い、サンスクリットと比較文法とを学ぶようになった。一八二九年、ベルリンでヒンドゥー教の民間説話「ブラーナ」(Brahma Vaivarta Purana Specimen)の研究で博士号を取得、ロンドンでは東インド会社所蔵のサンスクリット写本類を研究した。パリに移ってからは『マハーバーラタ』の一節「サーピトゥリー物語」を翻訳し、これは一八四一年に出版された。一八三三年に『ラグヴァンシャ(ラグの系譜)、カーリダーサの詩、サンスクリット・テキスト』(ラテン語)を出版。一八三三年、ドイツ(当時)のブレスラウ大学東洋語の助教授に採用された。その際、大学の給与だけでの生活は十分とはいえず、大学図書館でも働いた。一八四七年、ブレスラウの正教授となった。

彼の『クマラーサンバヴァ(クマラー神の誕生)』(カーリダーサ作)サンスクリット本の第二版は一八三八年に出版された。

一八四七年にはシュードラカの劇作『ムリッチャカティカ(土の小車)』を出版した(岩本裕訳がある『世界文学体系・インド編』筑摩書房)。このテキストの校訂は弟子のピツシエルがその後プラークリット文法を体系化する際、多大な影響を与えることになった。シュテンツラーはこの劇の中で登場人物がそれぞれ異なる方言、具体的にはシャウラセーニー、マハーラーシュトリー、マーガディーを話すことを明確化したからである。

一八七四年に、註釈と語彙を付して出版したカーリダーサ作『マーガドウータ(雲の使い)』は学生用に企画され

出版されたものである（木村秀雄訳がある）。

シュテンツラーはサンスクリットのレクシコグラフィ（辞典編集）は重要と判断し、自身が校訂する作品すべてにそれを適用した。一八四七年に『サンスクリット・レクシコグラフィ（辞典編集）の起源について』（フテン語）を発刊。

シュテンツラーのもう一つの大きな研究テーマは『ダルマシャーストラ』（法典）に関するものである。最初の仕事は『古代インドにおける刑事上の実例』（フテン語）で、一八四三年、プレスラウから出版された。一八四九年には『ヤージュニヤヴァルキヤ法典』の校訂本とドイツ語訳を刊行。『マヌ法典』と『ヤージュニヤヴァルカヤ法典』との比較研究はその後のインド法研究の基盤となった。シュテンツラーはインド法の成立年代をA.M.フォン・シュレーゲルが設定した紀元前七世紀以後としたのに対し、後二世紀以後と論じた。なお法典の起源を「グリフヤストラ」（祭事経）類からとする見解はその後承認されなくなった（シュタツヘ・ローゼン『ドイツのインド学者たち』）。一八六四年、『グリフヤストラ類—インドの家族・生活法、サンスクリット・テキストとドイツ語訳—』を出版。一八八六年に『グリフヤストラ』の索引を出版した。

シュテンツラーには「インド医学史について」（雑誌『ヤヌス（Janus）』）という論文もある。

サンスクリット研究の上でのシュテンツラーの重要な貢献は『サンスクリット文法の基本書』（荻原本の底本）を出版したこととされている。彼の生前中に第四版まで刊行され、本の印税はインド学で苦学する学生への奨学金にあてられた。

ところでこの文法書といえども、むしろ一朝一夕に成ったわけではない。その完成に至るまでにはベルリン大学の師フランツ・ポップの大きな影響がある。ポップは一八二七年に『詳細サンスクリット概説』、一八五二年にはギリシャ、ラテン、古スラブ語、ドイツ語などを比較した文法書『サンスクリット・アヴェスタ・ギリシャ・ラテン・リトニア・古スラブ・ゴート語・ドイツ語の比較文法』を出版している。こうしたポップなどの研究の基盤の上に

シュテンツラーの出版があったのである。

一八七七年二月二十七日、ブレスラウで八十年の生涯を終えた。

シュテンツラーの弟子でその後活躍したのはベルリン大学教授アルブレヒト・ヴェーバー、パリ語を専門としたイギリスのリス・デビイズ、サンスクリット文学のゲッティンゲン大学教授フランツ・キールホルン（一八四〇—一九〇八）、プラークリット文学のピツシエルがいた。

改訂者ピツシエル

シュテンツラーの文法書を第六版以後、補訂したのはポップの弟子ピツシエルである。彼の研究分野はインド最古のヴェーダ、ドラマ、仏教などと広汎な分野に渉るが、プラークリット文学に關する一大権威者となった。

ピツシエルは一八四九年一月十八日、ブレスラウの生まれ。一八七〇年、ブレスラウ大学でシュテンツラーの指導のもとに哲学博士号を取得。学位論文は「カーリダーサのシャクンタラーの諸校本について」（ラテン語）である。この『シャクンタラー姫』は一七八九年、植民地インドにイギリスの官吏として赴任したウイリアム・ジョーンズが当地で初めて読み、その感動をヨーロッパに報告した作品である。ピツシエルはそのデーヴァナーガリ版とベンガル版とを比較研究し（二年後に『フォルスターがドイツ語訳』、原型の再現は不可能であるものの、ベンガル版のほうが原型に近いと考えた（一八七八年にベンガル版の校訂本を出版）。

ピツシエルは一八七四年、やはりブレスラウで「プラークリット文学者たちについて」（ラテン語）を書き、大学教授資格論文となった。翌一八七五年、キール大学のサンスクリットおよび比較言語学の教授に就任。方言の一つ、「シャウラセーニーについて」の論稿は、クーン編集の『比較言語研究への貢献』第八に掲載された。また『シャ

クンタラー姫』劇にみられるプラークリット（方言）は前三世紀の文法学者ヴァラルチ（別名カーティヤヤナ）の定めた規則に従って校訂されるべきとした。一八七七年から一八七九年にかけてヘーマチャンドラの「プラークリット文法」と「プラークリット辞典」の校訂本を出版している。

一八八三年、キールで同僚のオルデンベルクとパリー文『デーラガーター（長老偈）』『デーリーガーター（長老尼偈）』を校訂出版した。一八八五年、ハレ大学に移り、一九〇〇年には副総長に就任。あやつり人形に関心を示し、あやつり人形の故郷について講義。また影絵芝居に関する故地はインドと考えた。一〇世紀のラージャシェーカラの作品『パララーマヤナ』にみられる「経師」（スートラダーラ）つまり劇の座頭とあやつり人形師は深い関わりがあるとした（ただしこの学説は直後に批判された）。

画期的な『プラークリット文法』はこの年、『インド・アリア文献学と古代学提要』のシリーズの一冊として発表された。彼の友人ゲルトナー（一八五二—一九二九）はこの書の完成を次のように激賞した、「待望のプラークリット文法書がいま私の目の前に置かれている。これはかれが半生をかけて研究した結晶である。このシリーズで発刊された作品中、質量ともに他を圧倒するもので、他のあらゆる貢献を凌駕し、インド学に関する文法書として卓越した功績である」と。この金字塔というべき業績によりピッシェルはバリのアカデミーからボルネイ (Volney) 賞を受賞している。

一九〇一年、ベルリン・インド学教授アルブレヒト・ヴェーバー没後、その後任となった。

ヴェーダに関する三冊本の『ヴェーダ研究』は一八八九年、一八九七年、一九〇一年に同僚ゲルトナーと共著で出版された。

翌一九〇二年、グリユンヴェーデル、ルコックを中心とする第一次ドイツ中央アジア探検隊が大量の写本類を持参して帰国すると、ピッシェルはさっそくトゥルファン委員会を先導した。自身の存命中、この探検隊は第三次まで派遣されている。サンスクリット写本の中から従来存在しなかったサンスクリットで書かれた漢訳『雜阿含経』に対応

する断片、あるいは『ウダーナヴァルガ』の断片などを次々と発見している。

ピッシェルはこうして仏教にも関心を寄せ始め、一九〇四年に『ブツダの生涯と教義』を著した。

一九〇八年、インド学界に衝撃が走った。ピッシェルはプラークリット語を講義するためにインド・カルカッタ大学に招聘された。ところが十二月二十六日、目的地カルカッタに到着する前にマドラスで没してしまったのである。ピッシェルが初めてインドの大地に足を踏み入れた直後のことであった (E.ヴァルトシュミット・Richard Pischel zum Gedächtnis, Nachruf zum 60. Todestag)。

シュトラースブルクに留学した荻原雲来はピッシェルの死に先立つ三年前、日本に帰国していた。一方、当地にそのまま留まっていた渡辺海旭は当時の様子を「リヒャルト・ピッシェル教授を弔す」と題して報告している。渡辺は師であるロイマン宅で友人二人とともにコーヒーを飲み、チェス(棋)をしているさ中、同門のシュラーダーが絵葉書を持参。そこにはピッシェル、インドへと認められていた。一同、手を止め、ピッシェルの前途を祝福し歓談した。その一週間後、ベルリンのハレンゼーからピッシェル死すの報が届いたのである。渡辺によると、ピッシェルの『プラークリット文法』は「学者の亀鏡」、『ブツダの生涯と教義』は「学人の指針」であり、プロシヤ出身のピッシェルはプロシア人の性格「率直剛遇」を体現した人と記している。渡辺はこの論説を次のように結んでいる、「希くは記憶せよ。この老碩学は六十の類齢病弱の体躯を持ちて、炎熱燬くが如き婆羅他(バラタ)の故地に投じ、遠く其最愛の夫人を離れ、賢良なる児息、俊秀の門下の看侍すら受くるを得ず。マドラスの病舎に卒然として独遊客死したることを」。カルカッタ大学では碩学ピッシェルを顕彰するために彼の蔵書を買上げ、「ピッシェル・コレクション」として特別室を設け閲覧に供している。

荻原雲来の『梵語入門』の出版は一九〇八年の八月であり、ピッシェルの死は同じ年の十二月であった。

『実習梵語学』は一九七四年に辻直知郎がフランスのルヌーヤドイツのキールホルンらの文法書を参考にして『サンスクリット文法』(岩波全書)を出版するまでの長きにわたってインド学徒に活用され続けてきた。最近、吹田隆

道氏によって例文を大幅に補綴した上で復刊をみている。

近代におけるサンスクリット文法書の出版